

病気の症状が出るのは、免疫が戦っているからです。

松本先生の理論を理解し治療されている方。

## 「SLE 治療経過報告」 匿名希望 48 歳

2016 年 7 月 19 日

### 1、はじめに

SLE を発症後手元にある他病院（K 国立病院・T 病院）での検査結果の記録と、2015 年 2 月に松本医院で治療を開始してからの検査結果を表 1 に記す。表 1 にはリンパ球の割合、貧血に関わる値、補体、その他 SLE 診断に用いられる抗体値を記してある。また、表 2 に病気に関わると思われる主な出来事をまとめた。これらを参照しながら話を進めたい。

	抗核抗体	抗ds-DNA 抗体	C3	C4	補体	リンパ球	ヘモグロビ ン量	尿蛋白定 性
正常値	40以下	0~10	60~116	15~44	25~48	23~52	11.3~15.2	(-)
2005/10/5	320	6	46	5	20.3	28.8	11.2	-
2006/11/14	160	5	42	3	20.8	32.9	11.9	-
2007/3/19	160	5	48	5	21.1	29.4	11.6	-
2007/8/1	160	5	38	4	19.7	28.6	11.1	-
2008/2/8	160	13	55	9	28.7	24.4	12.4	-
2008/7/16	320	12	32	3	18.8	24.9	10.8	-
2009/1/14	320	13	41	6	24.7	38.7	11.9	-
2009/12/10	320	14	43	7	26.7	28	12.3	±
2010/5/19	320	10	50	5	20.9	43.9	11.7	-
2010/11/11	320	10	48	6	20.7	29.6	11.9	-
2011/3/22	320	11	50	6	21.7	29.6	11.9	-
2011/10/5	320	10	57	7	21.6	23.9	11.6	-
2012/10/10			63	7		33.5	11.8	-
2013/9/19	160	13	58	5	16.3	21.5	11.4	±
2014/3/27		18					10.9	-
2014/5/29		30.9					11.9	1+
2014/6/26		29					11.6	±
2014/8/15		33.2					10.8	1+
2014/9/8	160	42	57	3	<12		10.4	-
2015/9/18		42.7	44					1+
2015/10/16		48.2	56					±
2015/11/27		90.4	54					-
2015/1/6	320	156	41	2	<12	37.2	10.1	-
2015/1/27		>400	49					2+
2015/2/7	640	276				20.6	11.4	3+
2015/3/17	160	221			<12	14	10.3	-
2015/4/7	640	371				32.1	10.4	-
2015/7/8	1280	174.1	46	5以下		26.2	9.1	2+
2015/9/2	640	134.9				27.6	9	2+
2015/9/30	320	233	44	2	<12	28.6	9.6	1+
2015/11/4	640	103.2	46	5以下		25	9.5	1+
2015/11/18								±
2015/12/21	640	89.7	49	5以下		26	9.2	1+
2016/2/5	320	88.5	44	5以下		32	8.9	-
2016/2/10								1+
2016/4/6								-
2016/5/9	320	64				29.5	9.1	-
2016/6/6								-

赤・K 国立病院 青・T 病院 白・松本医院

表 2

1992		結婚	
1994	5月	長女出産	出産1年後から不妊治療
1998	12月	流産	切迫流産のため入院、点滴治療
1999	3月	SLE発症	
2002	3月	次女出産	出産後、紅斑・脱毛の症状発現 尿たんぱく陰性
2013	6月		生理不順→閉経
2014	3月		抗ds-DNA抗体値上昇し始める 尿たんぱく1+
2015	1月		抗ds-DNA抗体値400超、尿たんぱく2+ 腎生検を勧められる
	2月		松本医院受診

## 2、SLE発症まで

1967年生まれ現在48歳である。幼少期には、発熱、湿疹、中耳炎、蕁麻疹、自家中毒などよく医者に世話になる子供であった。しかし、その後は、小学校3年の時の虫垂炎、高校2年の時の鼻骨骨折以外、大きな病気やけがをすることもなく、大学を卒業後、大学研究室に勤め、24歳で結婚し、26歳で長女を出産した。続けて第二子を望んでいたが妊娠せず、近所の産婦人科で卵管通気や排卵日に合わせてホルモン剤（名称わからず）を注射する治療を約1年続けたことがある。しかし、妊娠することはなかった。

引っ越しもあったことから不妊治療はやめ、自然に任せていたところ、1998年10月妊娠し、第一子の時に何も問題がなかったため、普通の生活を送っていた12月、出血があり切迫流産と診断され、入院し安静、点滴治療（薬名不明）3週間の後、稽留流産となり掻爬手術を受けた。このころ夕方になると全身に出る蕁麻疹に悩まされた。先生の論文「なぜ女性ホルモンは免疫をおさえるのか」にあるように、不妊治療におけるホルモン療法、妊娠・切迫流産治療により抑えられていた免疫が、元に戻ろうとして戦った結果翌年の紅斑出現につながったと考えている。

翌年1999年3月、鼻付近に直径1cmほどの紅斑が2つでき、なかなか治らなかったので、K国立病院皮膚科を受診したところ、SLEの疑いにより血液検査となった。結果、抗核抗体陽性によりSLEと診断された。ここで紅斑部分の皮膚を切り取り検査された（後日T病院の先生に全く必要のない検査と言われる）。このとき皮膚科の医師になんの為に皮膚を切り取るのか質問したが、返ってきた答えは「皮膚の細胞検査の結果を見ないとあなた納得できないでしょう？」であった。次に回された膠原病専門医のA医師の説明も人間味のないものであった。一通りの説明の後、「もう一人子供を産むことはできるか。」とたずねたのであるが、返答は「価値観の問題だから」と一言であった。その他にもいろいろと心に引っかかるものはあったのだが、そのときは、病気を宣告されたショックとこれからの生活への不安から、これらの医師の言動をあまり深く追及はしなかった。このときは、皮膚症状のみだったため幸いにもステロイドは処方されず、3ヶ月ごとの検査となった。また注意事項として言われたことは

- ・紫外線にあたらないこと
- ・骨折等ケガをしないこと

### ・風邪をひかないこと

であったので、日焼け止めを塗り、夏でも紫外線カットの長袖を着用する生活となった。じんましんも毎日のように出続け、原因もわからなかったが、肉類・乳製品の摂取を一切やめたところ、症状が軽くなった。現在は、乳製品は摂取しているが、肉類は全く食べていない。

医師からは、紫外線にあたることによって細胞が壊れむき出しになった核を異物とみなし攻撃してしまうので症状が悪化すると説明されたが、太陽の光を浴びることによって免疫が上がるからなのだと思う。ケガをすることや風邪をひくということも、本来の体の機能として治そうとする力が働くため、他の部分でも戦いが起こり、症状が悪化しているように見えるということなのだろう。つまり、松本先生の言うように様々な病気の症状と言われるものは、悪化しているから出現するのではなく、免疫が上がり治そうと自分自身が戦うから出るものなのだとは今は理解できる。

### 3. 松本医院受診まで

K国立病院から家に帰り落ち着いてから、その日の対応を振り返ったとき、医師として、人として信頼できないとの思いが大きくなり、また前年に妹が同じくSLEを発症していたことから、親からの遺伝や体質、娘への遺伝等、信頼できる、質問に対してきっちり答えてくれる医師を求めて別の病院をさがすことにした。こうしてT病院のY医師、後任のH医師に診て頂くことになった。この二人は、できるだけステロイドや免疫抑制剤は使わず、たとえ検査の結果が悪くても目の前の患者を診て元気と判断すれば薬は使わず様子を見るという方針の医師であった。この先生のもと、第2子希望の相談をし、心臓病の子供が生まれる可能性のある抗体を検査してもらい、その抗体がなかったので、「産むなら薬を飲んでいない今ですよ。」との言葉をいただいたのであるが、「ただ妊娠・出産によって8割の人は病状が悪化します。」とも言われ、夫婦で考えた末、妊娠し2002年出産した。余談であるが、K国立病院にも並行して検査を受けに行っており、A医師に妊娠を告げたのであるが、「バカな患者だな。」くらいの反応であった。後日生まれた次女を伴って受診したときも子供には一瞥もくれず一言もなかった。T病院のY医師は、次女を見たとき「生まれたねえ、無事元気に生まれてよかった、よかった。」と抱っこまでしてくれた。医師としてというよりも人としての心の問題だなと思ったものである。

妊娠・出産による腎臓など内臓的な悪化はなかったが、出産後しばらくして、顔には下記写真のような紅斑が出現し、脱毛も激しかった。しかし、1年程で紅斑は消え、脱毛は時間はかかったが5年程で元通りになった。これも、先ほど述べたように、妊娠・出産が病気を悪化させるわけではなく、妊娠中に女性ホルモンによって抑えられていた免疫が産後上がり、ヘルペスウイルスや化学物質を排除しようと戦うために起こったものなのだ。



その後は、特に大きな変化もなく、K国立病院、T病院ともに半年から1年ごとに血液・尿検査を受けていた。2014年3月頃からK国立病院において、抗ds-DNA抗体値が上昇しているとのことから毎月の検査となり、2015年1月の検査で抗ds-DNA抗体値が検出可能な400を超えたこと、尿たんぱくが2+となったことから腎生検を勧められ、腎内科に回された。腎生検の説明を一通り受けたが、炎症を示すほかの値もないのに、なぜ腎臓を傷つけなければいけないのか、妊娠・出産を経ても内臓的に悪化しなかったものがなぜ今悪化するのかと質問したが、腎生検の結果を見ないとわからないとの回答だったので、すぐにT病院のH医師に聞いてみようとしたのであるが、連絡が取れずにいたところ、夫がインターネットで大阪の松本医院を見つけた。腎生検を断り、帰宅して松本先生の論文、患者さんの手記を読み続けた。

ステロイドは絶対に使わない、自己免疫疾患はない、自分の免疫で治す、糸球体腎炎は治るなどなど、それまで15年医者から言われていたことと全く違う内容に引き込まれ、繰り返し読んで納得し、週末に受診することに決め、2015年2月夫婦で高槻に向かった。

#### 4、松本医院受診

初診の印象は、正直かなり緊張していたのかあまり覚えていないのだが、一通り今までの経緯と検査結果をお話しし、「大丈夫や、自分で治すんやで」と握手して頂き、「今までほかの医者嘘に振り回されているんなこと我慢してきたんやな、もうそんなに固い表情しなくても大丈夫やで、治るで。」と言っていたとき、ほっとしたのか涙が溢れてしまい、先生が「ティッシュ、ティッシュ」と慌てて、ティッシュを探してくださったことを覚えている。そのとき、「ああ、ここまで来てよかったな、治るなあ。」と漠然とではあるが先生への信頼感が湧いた。その後、血液検査、漢方風呂の説明、鍼灸治療を受け、薬局にて漢方薬を処方してもらい帰途についた。

1週間後、電話で検査結果を伺い、単純ヘルペスと水痘ヘルペスの抗体価が異常に高いことが分かり、最初に処方して頂いた3種類の漢方のうち2種類が倍量になった。現在も飲み続けている3種類の漢方は

食前：大防風湯 食後：治打撲一方湯 食間：補中益気湯

である。これに加えて毎食後と寝る前にアシクロビル8錠/日を飲むこととなった。1か月漢方薬を飲み続け、T病院で検査を受けたところ、尿たんぱくは-となった。これは今思えば、たんぱく2+の時は、間質性膀胱炎も起こしており、アシクロビル服用によって、たんぱく-となったのではないかと思う。しかし、そのときはまだヘルペスのしつこさなど解っておらず、2~3か月も薬を飲めばクラススイッチするだろうと甘い考えを持っていたのだが、15年以上も治らなかったSLEがそんなに簡単に変わるはずもないことに気付いた。薬を飲めば治るものではなく、あくまでも薬もお灸も免疫を上げるための手助けであり、自分の心持ちが免疫を上げ治すということを心底からわかっていたとは言えなかった。それでも、少しずつ体は変化して、3月には体のあちらこちらに湿疹が出て、膝裏やももの裏に小豆大ほどの結節ができては消えること

を繰り返したが、手記にあるようなアトピーは現れず、4月にぎっくり腰のような腰痛とサワサワする帯状疱疹の出始めのような感覚が背中に表れ、5月には、膝・手首・足首などの関節に日常生活に支障をきたすほどの痛みが日替わりで出た。6月、寝返りが打てない背中の痛みと38度の熱が3日続き、このころより血圧が上がり始め150mm/hgを超えるようになり、また貧血も進み、尿たんぱくも2+となった。尿たんぱくはこの後9月中旬まで2+が続くことになる。

体の痛みについて線維筋痛症の方の手記を読み、高血圧について徳弘徳子さんの手記を読み、漢方風呂に入りながらタブレットで毎日のように更新される皆さんの手記を読み、貧血については先生の論文「何故リウマチになると貧血が起こるのか」「補体について」を読み、2ヶ月おきの大阪と2週間おきの遠隔治療で、そのとき心配なこと、わからないことを先生に質問し、漢方薬とアシクロビル服用、鍼灸、漢方風呂を続けた。たんぱく尿のことばかり心配していたので「それは気にせんでいい。」と先生に叱られたこともある。



また、いろいろな個所の痛みに加えて、上記のような紅斑が手足に出ることもある。ずっと続くわけではなく、4～5日で消えることが多い。これらの紅斑に痛みはない。これは洋服などでおおわれていない部分に出現する。顔に出る蝶形紅斑も紫外線にさらされた結果と言われるが、常に何らかの刺激を受ける場所に出るのではないかと思う。

こうして9月になり、ある日尿たんぱくが1+に下がった。このとき先生は「やっと掃除が終わったということや。」とおっしゃられた。なるほど、免疫が上がり戦って傷ついた腎臓や膀胱の細胞が掃除されたのだと理解した。しかし、このころから毎月膀胱炎を繰り返すようになった。これについて先生は一応抗生物質を処方してくれたが、「ヘルペスによる間質性膀胱炎だと思うからアシクロビルを12錠/日に増やして、抗生物質と比べてみる。」とのことだったので、アシクロビルを増やしたところ症状は消えた。

抗核抗体、抗ds-DNA抗体も下がりつつあり、2016年になってからは、先生に「今心配な症状はなんや？」と聞かれても、咄嗟には答えられないほどになり、大阪に伺ったときも「すっきりした顔しとんなあ、ここは病人の来るところやで。」と言われるほどになったが、先生のEBウイルスに対する研究が進み、SLEもEBウイルスが関係していることから、3月からアシクロビルを16錠/日に増やした。5月の検査では、EBウイルス抗体値は6.5。次回伺った時にサイトメガウイルスについても検査の予定である。EBウイル

スは、粘膜に多く感染しているとのことである。間質性膀胱炎を繰り返したこと、アシクロビルを増やしてから膀胱炎の症状は全くでなくなったこともうなずける。

また、2014年3月頃から検査数値が変化してきているのであるが、その前年2013年生理不順となり、婦人科で黄体形成ホルモン（LH）、卵胞刺激ホルモン（FSH）、エストラジオール（E<sub>2</sub>）を検査してもらったところ、閉経に向かっているとの結果であった。つまり女性ホルモンが減少し始めていたということである。そのため徐々に、抑えられていた免疫があがりSLEの検査数値が変化したと考える。このとき、ホルモン剤投与によって生理を人工的に起こす治療をしましょうと言われたのであるが断った。自然の働きを妨げるような選択をしなくてよかったと思う。

今回の検査が楽しみになってきた今の自分を、腎生検を宣告されたときには想像もできなかった。完治ということが、どのような状態を指すのかまだわからないが、先生に「手記を書け」と言われたということは、一つ山を越えたということだと思っている。

同じくSLEである妹はアメリカ在住時に発症し、ステロイド80mg/日の治療から始まり、3年後帰国時に腎生検、腎臓は65%しか機能していないと言われていたが、その後フランス・アラブ首長国連邦・南アフリカにおける治療の中で、ステロイドを10mg/日まで徐々に減らしつつ、1年前に日本に帰国した。しかし、帰国直後に腎臓結石で緊急入院した際に、その病院に膠原病科がなく、服用中の薬を取り上げられ、いきなりステロイドを切られたためか40度の熱が10日間続き、死に直面した。途中からステロイド服用許可となったため、なんとか熱も下がり、退院することができた。ここでも、ステロイドは確かに即効性があり、炎症も抑えるのであろうが、それは症状が見えなくなっただけのことで、病気を治しているわけではないこと、飲み始めたら簡単にはやめられない怖さ、服用中止したときのリバウンドの大変さを実感した。妹は退院後、T病院H医師に診て頂きステロイド減量を進めている。自分は、今まで一度もステロイドを服用することなく松本先生に出会えたことを幸運に思う。

最後になりましたが、もし松本先生に出会わずに、腎生検を受けていたら、ステロイド服用となり、戻れない道を進むところでした。

博識でユーモアあふれる先生とお会いするのは、楽しい反面、自分の勉強不足から緊張を強いられるのも事実です。けれども、50歳近くになって、このように今まで知らなかったことを勉強できることは幸せなことだと思います。まだまだ、先生にお世話になるとはと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。